

緒言

◇本書の初版が世に出たのは大正十四年一月の事で、それから七年目の昭和六年に新訂版が成り、茲にこの更訂（昭和十三年）を見るに至つた次第である。

◇所謂現代文とは明治以来の作品を概稱する言葉で、中等教育の國文題材として、従つて又入試問題の題材として、古文と相半ばするだけの重要性を持つたものである。

◇私はこの一年の間に三つの解釋法——國文と漢文とそしてこの現代文との更訂を完了した。これで私の『解釋法』は國漢文教科の、又國漢文入試準備の、鼎の三足として、ゆるぎなきものとなり得た事を確信する。

◇更訂版を一貫した精神は、「より正しく」「よりやさしく」「より効果的に」といふ事である。微力固より至らぬ點はあらうが、更訂版の三種が三種、皆この精神の具現に於て、少くも自分としては十全の努勉を致した事を告白して憚らない。

◇本書の題材はその半數を實際の入試問題から採つた。現代文問題の大多數は句讀つきであるが、今本書に於ては、學習上の見地と、一冊の書物としての統一の上とから、凡て句讀を取つて了つた。讀方に於ける句讀は私自身の見解に依つたもので、必ずしも出題のそれとは合つてゐない。特に出題者諸賢の御寛宥を冀つて置く次第である。

◇國文や漢文の更訂と相俟つて、この現代文の更訂が、果して私の期待したやうに、諸君の學習の上に「より正しく、よりやさしく、より效果的に」役立つ事が出来れば、それはひとり私のみの欣幸ではないであらう。

目次

總説篇

現代文の種類	一
本書の意圖	四
入試問題の傾向	五
本書の學び方	一三

摘解篇

(一) 何人にも他に知られたき念あり(大阪外語・海兵)	一六
(二) 正岡子規の「歌よみに與ふる書」は(大阪外語)	一九
(三) 四聖の中釋迦を除きては(大阪高醫專——高山樗牛)	二一
(四) 早曉臥床をいでて(大阪商大豫——北村透谷)	二三
(五) 眼前に英雄的行動を見て(大阪商大高商部)	二五
(六) あらゆる國民的資源資力を集結するの必要は(大阪商大高商部)	二六
(七) 國を富ますは必ずしも國を弱むる所以にあらず(海機)	二七
(八) 日本帝國が開關以來絶海に孤立し(海機——大西祝)	二九
(九) 人は未發の憂患を豫想して苦悶するの愚をなすが如く(海機)	三二
(一〇) 一代の聲望をあつめて天下の歡迎を受け(京都醫大豫)	三六
(一一) 我等は自由人として理想を求め(京城高商)	三九
(一二) 學藝に志ある者は能く外に受くる大賢の如くなる能はずとも(京城高商——幸田露伴)	四一
(一三) 神皇正統記は血を以て書かれたる歴史である(京城高商)	四四
(一四) 秋は何等の天文地采の形式を借らざる裸體のまゝなる思想なり(京城高商——綱島梁川)	四六
(一五) 住みにくい世から住みにくい煩を引きぬいて(平壤醫專・神戸商船・横濱専門——夏目漱石)	四八

(一六)	凡そ内部に待つものなければ外力の來るに應ぜず (七高——藤岡作太郎) ……………	五二
(一七)	老将は兵を談ぜず良賈は深く藏す (大邱醫專・神戸商船・廣島高校——幸田露伴) ……………	五四
(一八)	我等は着實なる精神を以て學藝の根本的研究を勉めざるべからず (第二早高) ……………	五六
(一九)	平清盛は藤原氏の習慣的勢力に反撥して起れるなり (第二早高) ……………	五七
(二〇)	枝ぶりいたましげに瘦せたれど (臺北高校) ……………	五九
(二一)	無念無想なれといふは執着的偏固的私我的の念想を絶てよといふことなり (高岡高商) ……………	六二
(二二)	農業經濟の時代には國の本は山にありとする (高岡高商) ……………	六四
(二三)	先生はその一方に武士的生活を攻撃するに拘はらず (高松高商——島田三郎) ……………	六六
(二四)	若し夫れ明日は未得の寶なり今日は已得の寶なり (津田英學塾——坪内逍遙) ……………	六八
(二五)	俚諺の特徴は概ね其の形式短小にして却て其の意義深長なる點に存す (東京高校) ……………	七一
(二六)	一江の野渡には對岸を虚無に封じて仙境の縹緲を欺き (東京商大専門) ……………	七二
(二七)	萬葉集は我が國に於ける最も古き歌集で (東京女子大) ……………	七四
(二八)	詩人は第二の造化なりといふ (富山高校) ……………	七五
(二九)	複雑なる性格の君は世に處して婉曲を辭せず (富山高校) ……………	七七
(三〇)	徒然草の作者は書中至る所に巧妙な譬喩を借りて無常迅速の世相を説き (新潟高校) ……………	七八
(三一)	繪畫道の語に氣韻生動といふことがある (新潟高校——岩城準太郎) ……………	八一
(三二)	内省は自己の長所を示すと共に又その短所を示す (新潟高校) ……………	八三
(三三)	君が西航の首途を横濱に送りたる日 (日大専門部醫學科——高山樗牛) ……………	八五
(三四)	吾人は決して外患を恐れざるなり (新潟高校・廣島高校——徳富蘇峰) ……………	八六
(三五)	我が國の古典や古き詩歌を顧みると (福岡高校) ……………	八八
(三六)	嗚呼先生は一世の俊傑を以て中興の興業を賛畫し (平壤醫專) ……………	八九
(三七)	糲米の粗飯を餐し水を飲みて酒漿に代へ (平壤醫專) ……………	九一
(三八)	毀譽褒貶の海ともいふべき世の中に生れながら (平壤醫專) ……………	九三
(三九)	頼み難きは我が心なり (平壤醫專——高山樗牛) ……………	九四

(四〇)	短き秋の日影もや、西に傾きて風の音さへ澄み渡る (平壤醫專・東京醫專——高山樗牛) ……	九七
(四一)	吾人の生息し居るところは現實世界なるをもつて (松本高校) ……	九八
(四二)	社會の眞相は複雑であり深刻である (松本高校) ……	一〇〇
(四三)	色々な古典的な文獻に現れた希臘の宗教及び神話 (松山高校) ……	一〇二
(四四)	嗚呼小兒の心か (山口高校——高山樗牛) ……	一〇四
(四五)	彼れ十七歳の時江戸に來るや富士山を詠じて云く (山口高校——徳富蘇峰) ……	一〇五
(四六)	聖上陛下には朝見の御儀におかせられて (山口高校——山内利之) ……	一〇八
(四七)	宮づくりの素朴と單一とは (山口高校——北原白秋) ……	一〇九
(四八)	そもく平安朝の貴紳淑女は鴨桂二川の流域數里の間を己が世界とし (横濱専門——藤岡作太郎) ……	一一二

(四九)	信長は亂世の英雄たるにふさはしき多くの奮闘的素質を有したりき (陸經) ……	一一四
(五〇)	新を求める人の心は決して安らかなものでない (陸士) ……	一一六
(五一)	世間が正しいか自分が正しいか (陸士——阿部次郎) ……	一一八
(五二)	一たび天地の父母の懷に身を委ねたるもの (陸士——網島梁川) ……	一二一
(五三)	花見といふ遊樂が年中行事の一つとなつて (六高) ……	一二三
(五四)	伽藍はたゞ單に大きいといふだけではない (岩手醫專——和辻哲郎) ……	一二五
(五五)	たまく海外形勢の變化に伴ひ英露の二國南北より窺ひ迫るに及び (岩手醫專) ……	一二八
(五六)	我が國民は淡白な國民である (岩手醫專) ……	一二九
(五七)	カーライルは何の爲に此の天に近き一室の經營に苦心したか (岩手醫專) ……	一三一
(五八)	古より梅花の譬喩に引かるゝ二様の意義に於てす (岩手醫專——三宅雪嶺) ……	一三三

大意篇

(五九)	總ては行く處へ行着いた (芥川龍之介) ……	一三七
(六〇)	一年の中最もよく余の心と調べを等しくするのは (阿部次郎) ……	一三九

(六二)	秋の眺めはやはり霜に晴れて空の高く澄んだ日の方がよい (五十嵐力)	一四二
(六二)	一代の人心を擧げて美の一筋を追はんとする程にあらざば (上田敏)	一四四
(六三)	西歐の文化は其の廣袤に於て其の深邃に於て (上田敏)	一四五
(六四)	生物は物界の花理想的生活は生物界の花なり (大西祝)	一四七
(六五)	梅に取るべきは其の香奇古なる其の幹 (大町桂月)	一四九
(六六)	櫻は多きをよしとす (大町桂月)	一五〇
(六七)	あをによし奈良の都は荒れはてて (大町桂月)	一五二
(六八)	荒涼たる山河當年の殘礎を覚めむとしても又得べからず (大町桂月)	一五四
(六九)	歌が當時の先進國の韻文即ち漢詩と異なるが如く草假名は漢字とは同じくない	
	(尾上柴舟)	一五五
(七〇)	私は藝術が藝術である所以はそこに藝術的表現があるかないかに依つて定まると思ふ	
	(菊池寛)	一五八
(七一)	病みて他郷にある人の身の上を氣遣ふは人も我も變らじ (北村透谷)	一六〇
(七二)	且に平氏あり夕べに源氏あり飄忽として去り飄忽として來る (北村透谷)	一六一
(七三)	夢の世界に於て我等は決して眠つて居るのではなく眞の意味に於て實は目覺めて居るのだ	
	(厨川白村)	一六三
(七四)	花に酔ひたりし昨日の夢の今日簾外の青山に覺めて (幸田露伴)	一六六
(七五)	秋風の音は人もいひふるしたれど (幸田露伴)	一六八
(七六)	評の性は多く褒貶毀譽を具し (幸田露伴)	一六九
(七七)	大丈夫當に受發の二途に於て大丈夫の覺悟を以て立ち (幸田露伴)	一七一
(七八)	人貶すれば便ち受けずして胡言亂説し (幸田露伴)	一七二
(七九)	沈黙は愚人の甲冑なり奸者の城塞なり (幸田露伴)	一七四
(八〇)	趣味は人の嗜好なり見識なり (幸田露伴)	一七五
(八一)	足らざることを知るは滿つるに到る路なり (幸田露伴)	一七七

(八二)	大家族的精神で貫かれてゐる日本精神は(小西重直)……………	一七八
(八三)	私は最近に於ける我が國の社會思想の傾向が(島崎藤村)……………	一八一
(八四)	「眞の人間を書くことに骨折りたい」とトルストイは言つたといふ(島崎藤村)……………	一八三
(八五)	下り行く奔湍激流に舟は右に曲り左に折れながら(杉村楚人冠)……………	一八四
(八六)	こゝに鳳闕の礎むなしく残り椒房の嵐夜夜悲しむ(高山樗牛)……………	一八六
(八七)	宗教とは生きんがための教に非ずして死せんがための悟りなり(高山樗牛)……………	一八七
(八八)	自然を師とするものは自然を解する法を知らざるべからず(高山樗牛)……………	一八九
(八九)	國破れて山河ありといふともしかも天上の明月の長へに渝らざるに較べば(高山樗牛)……………	一九〇
(九〇)	孔子既に志を魯に得ず(高山樗牛)……………	一九一
(九一)	釋迦の當時印度には幾多の哲學ありき(高山樗牛)……………	一九三
(九二)	新しさからあらゆる事が始まる(田山花袋)……………	一九四
(九三)	見よ秋の潭に淵黙の智あり(綱島梁川)……………	一九六
(九四)	詩を讀みて當然起り來る美意識以外(綱島梁川)……………	一九八
(九五)	意ふに詩と神と太源一なり(綱島梁川)……………	一九九
(九六)	芭蕉は一併人なり(綱島梁川)……………	二〇一
(九七)	今の世には何ぞ熱情をもて友を求むるもの少き(綱島梁川)……………	二〇三
(九八)	わが國の詩人文人の四季に對する感想はおしなべてかたよりたり(坪内逍遙)……………	二〇五
(九九)	人は秋季の美しきをひたすらに哀しきものに思ひなして(坪内逍遙)……………	二〇六
(二〇〇)	げにや秋の想は蕭殺慘澹たる者なれど(坪内逍遙)……………	二〇七
(二〇一)	春の長閑に和げる(坪内逍遙)……………	二〇八
(二〇二)	余が冬を愛するは(坪内逍遙)……………	二〇九
(二〇三)	凡そ人の其の趣味性に適合せる文學(坪内逍遙)……………	二一一
(二〇四)	この宇宙ほど不思議なるはあらず(國木田獨步)……………	二一二
(二〇五)	楊巨源の詩に曰く(徳富蘇峰)……………	二一四

(一〇六)	知己は敵人にあるのみならず生面の人にもあり(徳富蘇峰)	一一五
(一〇七)	思ひを陳ぶる何ぞ必ずしも三寸の舌のみならんや(徳富蘇峰)	一一七
(一〇八)	人天然と親しむ時に於ては(徳富蘇峰)	一一九
(一〇九)	年中の景物凡そ首夏の新樹と晩秋の黄葉といづれをか選ぶべき(永井荷風)	一二一
(一一〇)	生命は最も偉大な謎であり生活體は確かに宇宙の驚異である(永井潛)	一二二
(一一一)	自分の我執と他人の我執とがち合つて(中村吉藏)	一二四
(一二二)	天地創造の時は斯うでもあつたらうか(中村吉藏)	一二六
(一二三)	春は眠くなる(夏目漱石)	一二八
(一二四)	茫々たる薄墨色の世界を(夏目漱石)	一二三〇
(一二五)	親の愛は純粹である(西田幾太郎)	一二三一
(一二六)	煌々たる活動の日の光西に沈めば(芳賀矢一)	一二三三
(一二七)	凡そ我等人間を救済するものが三つある(藤井健治郎)	一二三五
(一二八)	變幻出沒極りのないのが人生の姿である(藤井健治郎)	一二三六
(一二九)	余輩が歴史上の事實を一の戯曲として最も興味を感じるは(藤岡作太郎)	一二三八
(一三〇)	祇園精舎の鐘の聲沙羅雙樹の花の色(藤岡作太郎)	一二三九
(一二一)	清盛は縦横無碍に奮戦し(藤岡作太郎)	一二四一
(一二二)	西行は生れながらの歌よみにして歌を作るものにあらず(藤岡作太郎)	一二四二
(一二三)	藤原俊成の詠するところ(藤岡作太郎)	一二四三
(一二四)	一體歳晩から年頭にかけて我々の心は二つの方面に向つて動く(藤村作)	一二四五
(一二五)	人間性に乏しい硬化された化石的社會が(本間久雄)	一二四七
(一二六)	秋に入りて草木多く色を變じ(三宅雪嶺)	一二四九
(一二七)	舟のゆくては杳茫たる蒼海にして(森鷗外)	二五一
(一二八)	眞人間といふことを除いては藝術家はあり得ない筈だ(吉田紘二郎)	二五三
(一二九)	試に見よその圓い滑らかな肩の美しさ(和辻哲郎)	二五四

(一三〇)	今や世界國際の關係國民の交渉は實に近く且つ密である(臺北高商——藤村作)	二五六
(一三一)	勞働は人生夢幻觀と撞着す(高岡高商)	二五八
(一三二)	現在の生活が吾々の終局なのか(高岡高商)	二六〇
(一三三)	人生の意義は人間が人間を超越するところにある(高岡高商)	二六三
(一三四)	芭蕉の生涯は旅人の生涯であつたばかりでなく飄泊者の生涯であつた	
	(東京女高師——島崎藤村)	二六五
(一三五)	自由といふことを單に無干涉といふ意味に解釋し(八高)	二六七
(一三六)	人汝を傷けて汝之を怒るとき(八高)	二六九
(一三七)	人類生活の深い意義から見れば(八高——金子馬治)	二七一
(一三八)	皇紀二千五百九十四年之を天地の悠久より觀れば(八高)	二七四
(一三九)	由來人生は藝術である(八高)	二七六
(一四〇)	同じく輸入超過といふ中にも二様の意味がある(八高)	二七八
(一四一)	詩人の詠物畫家の寫生は同一機軸なり(姫路高校)	二八一
(一四二)	一國民の言ひ慣れたる俚諺の内容を深く研究すれば(横濱専門——大西祝)	二八二
(一四三)	大丈夫苟も身を學藝に委ねんとせば(横濱専門——幸田露伴)	二八四
(一四四)	郷土の魅力は今更ながら不思議なものである(横濱専門)	二八六
要 旨 篇		
(一四五)	人間の心には互に矛盾した二つの感情がある(芥川龍之介)	二九〇
(一四六)	眞正に強さを示すものはその實現である(阿部次郎)	二九一
(一四七)	吾々が最高の處まで吾々の中に潜んでゐる力を發揮しようとするならば(阿部次郎)	二九四
(一四八)	例へば大きな水流を私は心に描く(有島武郎)	二九六
(一四九)	國語は國體の標識となるのみならず(上田萬年)	三〇〇
(一五〇)	生物は世界の花なり(大西祝)	三〇一

(二五二)	嗚呼國家昏亂して忠臣現れ天下太平にして小人陸梁す(大町桂月)	三〇二
(二五二)	深夜人去り草木眠つてゐる中に(菊池寛)	三〇四
(二五三)	夜更けて枕の未だ安まらぬ時(北村透谷)	三〇六
(二五四)	夢見ましやと思ふ時(北村透谷)	三〇八
(二五五)	他を議せんとする時尤も多く己れの非を悟る(北村透谷)	三一〇
(二五六)	墳墓何の權かある(北村透谷)	三一一
(二五七)	わが切なる願は眠より醒めんことなり(國木田獨歩)	三一三
(二五八)	我々の生活が實利實際といふものから淨化され醇化されて(厨川白村)	三一四
(二五九)	甲人乙人を議す(幸田露伴)	三一六
(二六〇)	多く言ふこと勿れ(幸田露伴)	三一八
(二六一)	生命は流動する(相馬御風)	三二〇
(二六二)	平凡をさげすみ嫌ひ(相馬御風)	三二一
(二六三)	寂然とした古池に小さい一個の生けるものが音を生んだ(相馬御風)	三二三
(二六四)	人々は何故に自分の郷土といふものに心を引かれるのか(相馬御風)	三二六
(二六五)	嘗て一古寺に遊ぶ(高山樗牛)	三二七
(二六六)	人生終に奈何これ實に一大疑問にあらずや(高山樗牛)	三三一
(二六七)	新しさに向つて波打つ心は(田山花袋)	三三二
(二六八)	假令活動向上が何等の較著なる効果を産せずとも(綱島梁川)	三三四
(二六九)	藝術には比較的孤獨性に透過したものと普遍的なものがある(徳田秋聲)	三三五
(二七〇)	凡そ現在の大敵は過去の我に如くはなし(徳富蘇峰)	三三六
(二七一)	浅い鍋は早く沸きたつ(得能文)	三三八
(二七二)	自分は梅の花を見ると(永井荷風)	三四〇
(二七三)	内的の精神生活を外界に推し及ぼさんとするに有力な手は(永井潜)	三四一
(二七四)	げに變遷反復極りなき人間の思想は(永井潜)	三四二

(二七五)	あととは静かである(夏目漱石)……………	三四三
(二七六)	智に働けば角が立つ(夏目漱石)……………	三四六
(二七七)	踏むは地と思へばこそ(夏目漱石)……………	三四八
(二七八)	塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす(夏目漱石)……………	三五〇
(二七九)	カントがいつた如く物には皆値段がある(西田幾太郎)……………	三五一
(二八〇)	意識の自由といふのは(西田幾太郎)……………	三五二
(二八一)	新古今集にある定家の歌に(野口米次郎)……………	三五四
(二八二)	花紅葉いろ／＼な眺はもとより美しいに相違ない(芳賀矢一)……………	三五七
(二八三)	我等に苦み悩みのあるのは(藤井健治郎)……………	三五八
(二八四)	職なき舟は行方を知らず(藤岡作太郎)……………	三五九
(二八五)	愛着は迷ひなり(藤岡作太郎)……………	三六〇
(二八六)	一昂一低伸びたるは縮まざるを得ず(藤岡作太郎)……………	三六二
(二八七)	社會の進歩するに従うて(藤岡作太郎)……………	三六三
(二八八)	鎌倉以後佛教は深く人心秘奥の琴線に觸れ(藤岡作太郎)……………	三六四
(二八九)	理想と現實とを劃然分けて考へるのは(藤村作)……………	三六五
(二九〇)	世界大戦争は色々の意味で世界の劃期的大事件であつた(藤村作)……………	三六七
(二九一)	社會が文藝的教養に於て低いといふことは(本間久雄)……………	三六九
(二九二)	日本の三種の神器は(三宅雪嶺)……………	三七〇
(二九三)	彰著の功を樹てて(三宅雪嶺)……………	三七一
(二九四)	虎の虎たるは山野に自由を得るに存す(三宅雪嶺)……………	三七二
(二九五)	自分は凡てか零かの主義者ではない(武者小路實篤)……………	三七三
(二九六)	己はいつもはつきり意識しても居ず(森鷗外)……………	三七五
(二九七)	風水相撃ちて波を爲す(山路愛山)……………	三七七
(二九八)	山の姿は私達の散り易い心を集めて呉れる(吉江孤雁)……………	三七九

(一九九)	野原を通つて行く時(吉江孤雁)	三八〇
(二〇〇)	海へ向ふ時(吉江孤雁)	三八一
(二〇一)	藝術の尊いところは(吉田絃二郎)	三八三
(二〇二)	彼にとつては旅は凡てのものを淨化するものであつた(吉田絃二郎)	三八四
(二〇三)	我等は眞の現代と皮相の現代とを區別しなければならぬ(吉田靜致)	三八六
(二〇四)	田舎の自然は確かに美しい(吉村冬彦)	三八八
(二〇五)	或時私は私の樹の生育つた小高い砂山を崩してゐる處に佇んで(和辻哲郎)	三八九
(二〇六)	私の知人にも理解のいゝ頭と(和辻哲郎)	三九一
(二〇七)	嗟呼彼等は國の生命なり(京城醫專)	三九三
(二〇八)	我はこの繪を看るとき清穩の風景にあひて(京城高商——尾崎紅葉)	三九四
(二〇九)	佛教美術は白雉天平時代の人々にとつては(佐賀高校)	三九六
(一一〇)	古今集の歌人が開いた用語法の新しい境地は(佐賀高校)	三九八
(一一一)	尙古の陋なるが如く尙新もまた妄である(静岡高校——幸田露伴)	三九九
(一一二)	松陰や眞に英雄的風貌を具せず(七高)	四〇二
(一一三)	自殺を以て悖徳となすこと固より論なしと雖も(七高)	四〇四
(一一四)	祖國を知り祖國の精神の核髄に端的に觸れ(水戸高校——島津久基)	四〇六
(一一五)	勞働がその性質に於て自由で創造的であるときには(津田英學塾)	四〇八
(一一六)	眞理が尊敬の對象ならば(東京高師)	四一〇
(一一七)	科學は世界を一變した(東京女高師・津田英學塾)	四一三
(一一八)	生きとし生けるものその生める所の子を育て愛せざるものは無い(東京女高師)	四一五
(一一九)	あらかじめ成心を挟みて他に臨まむは(廣島高師——高山樗牛)	四一七
(一二〇)	文學の研究に金のかゝる文學の研究と金のかゝらぬ文學の研究とがある(廣島高師)	四一九
(一二一)	罪過は人間にとつて必然である(廣島高師)	四二二
(一二二)	文明とは主として人間の精神が(廣島高師)	四二五

解説篇

- (一三三) あれの西南一帯の海の潮が（泉鏡花）……………四二九
- (一三四) 「粗く斫られたる石にも神の定めたる運あり」とは沙翁の悟道なり（北村透谷）……………四三一
- (一三五) 芭蕉は日常生活の細目に精通した詩人であつた（島崎藤村）……………四三二
- (一三六) 世に佛に願ひて涅槃の寂寞を求むるものあり（高山樗牛）……………四三四
- (一三七) 山高きが故に貴からず（網島梁川）……………四三五
- (一三八) 飄然として何處よりもなく来り（徳富蘆花）……………四三六
- (一二九) 實在せる者は唯一である（永井潜）……………四三八
- (一三〇) 「来るに來所なく去るに去所を知らず」といふと禪語めくが（夏目漱石）……………四四〇
- (一三一) 死なぬ國と家とのためにこそ身は（森鷗外）……………四四二
- (一三二) 藝術はいつも藝術家自身の魂のために（吉田絃二郎）……………四四四
- (一三三) 徒然草はや、後のものではあるが（浦和高校）……………四四五
- (一三四) 時代的環境に順應する作家の作品の多くは（浦和高校）……………四四六
- (一三五) 我が國の神道は聖人の教訓ではなくて（浦和高校）……………四四八
- (一三六) 人間の心中に大文章あり（大阪外語・成城高校——北村透谷）……………四四九
- (一三七) 自然と人間との一體融合を前提とするものは（海兵・海經）……………四五〇
- (一三八) 事物の間に必至の因縁を認むるものに非ざれば（海經）……………四五二
- (一三九) 近時我が社會に於ては如何にも人心が弛緩してゐる（京城帝大豫科）……………四五四
- (一四〇) 自分の本の讀み方が（京城帝大豫科）……………四五六
- (一四一) 干戈天下に旁午して（京城帝大豫科——大町桂月）……………四五八
- (一四二) 女史平生寡言靜思その徳を修め（京城醫專）……………四六一
- (一四三) 富貴前にあり名利後にあり（京城醫專）……………四六一
- (一四四) 我々は妙に問ふにおちず語るにおちるものである（京城醫專——芥川龍之介）……………四六二

(二四五)	正義は強力なくして遂行することは出来ぬ(高知高校)	四六三
(二四六)	作品に於ける理想は露骨に宣言せず(高知高校)	四六四
(二四七)	有體に云へば詩境といひ畫界といふも(神戸高商——夏目漱石)	四六六
(二四八)	秀れたるもの、前に叩頭の至情を致し得るものは(静岡高校)	四六八
(二四九)	偉なる哉「人」(静岡高校)	四六九
(二五〇)	猿よお前は一體泣いてゐるのかそれとも亦笑つてゐるのか(成城高校)	四七一
(二五一)	茶の宗匠達は(成城高校)	四七三
(二五二)	信州の小諸に居た頃私は弓をやつたことがある(成城高校)	四七七
(二五三)	「閑かさや岩にしみ入る蟬の聲」は(成城高校)	四八〇
(二五四)	讀書固より甚だ必要である(大邱醫專)	四八一
(二五五)	小兒彼は何といふ驚くべき藝術家だらう(第二早高)	四八三
(二五六)	噫故郷こそはげに我が世のいと安けき港なりけれ(臺北醫專)	四八五
(二五七)	あらゆる藝術上の作品を理解し鑑賞する上に(高岡高商)	四八七
(二五八)	高野山の不動坂にさしかゝつた時(津田英學塾——和辻哲郎)	四八九
(二五九)	芭蕉と一茶との素質は(東京醫專)	四九一
(二六〇)	寒林枯木既に千紫萬紅の春を藏む(東京醫專)	四九二
(二六一)	あらゆる隨筆の中で最も圓熟して趣味に富み(東京醫專)	四九四
(二六二)	吉田松陰は天成の鼓吹者なり(東京醫專——徳富蘇峰)	四九七
(二六三)	私が或物を見て居る時私といふものがないとは云はれない(東京高師)	四九九
(二六四)	私達の生活は生それ自身の表現であります(東京高師)	五〇一
(二六五)	歴史は後代になればなるに従つて(東京高師)	五〇三
(二六六)	樹木の生長するのを注意して見てゐると(東京高師)	五〇六
(二六七)	ロマン・ロオランはそのミケロ・アンジエロの傳の中で(東京商船)	五〇九
(二六八)	傳ふる者曰く今の美術家中雅邦は丹青以上の(東京商船)	五一一

(二六九)	日本畫と西洋畫とは漸次混融して(東京商船——藤岡作太郎)	五二一
(二七〇)	人間には智者もあり愚者もあり徳者もある(東京商船)	五一八
(二七一)	床の間に挿す一輪の春花は春の自然の象徴である(富山高校)	五二〇
(二七二)	自分の生活の中心を名聲に置けば(名古屋高商)	五二一
(二七三)	自己をよくせんとする者は(浪速高校)	五二三
(二七四)	すべて詩的に感じられるものは(浪速高校)	五二五
(二七五)	教育のことはその源に遡らなければならない(奈良女高師)	五二六
(二七六)	鳥は大空を翔る(奈良女高師)	五二八
(二七七)	これが現在よと氣の附くその瞬間(奈良女高師)	五二九
(二七八)	芭蕉が浮世の名聞から離れて(新潟高校)	五三一
(二七九)	生活の倦怠は生活の煉獄である(新潟高校)	五三三
(二八〇)	露にたとへうたかたにたくへて(新潟高校——藤岡作太郎)	五三四
(二八一)	有萌は萬人の見て知るところなり(彦根高商)	五三六
(二八二)	私達にとつて決定的な事實は(姫路高校)	五三八
(二八三)	藝術は固より夢ではない(廣島高師)	五三八
(二八四)	上人の歌を作る(廣島高師)	五四二
(二八五)	善は行ひ難い(廣島高師)	五四四
(二八六)	この無頓着な人と道を求める人との中間に(廣島高師)	五四七
(二八七)	日本海岸の勝景は與謝内海に集る(廣島高師)	五五〇
(二八八)	忠君愛國は偶然に生ずるものにあらず(府立高校)	五五三
(二八九)	徳川幕府は外國交通の道を杜絶したけれども(府立高校)	五五四
(二九〇)	私は科學の進歩に究極があり(北大豫科)	五五六
(二九一)	性情の輕薄で頭腦の雋敏なものは(北大豫科)	五五七
(二九二)	人が全幅の力を傾倒して事に當るに際し(北大豫科)	五五九

(二九三)	我々は過去と現在と未來との關係について(北大豫科)	五六二
(二九四)	抑々わが身を不自由にするものは(北大豫科)	五六四
(二九五)	語の創新をめづるは人情の自然なれども(北大豫科——坪内逍遙)	五六七
(二九六)	品格は自重を意味す(松本高校)	五六八
(二九七)	生命のある所に法があり(松本高校)	五七〇
(二九八)	高士の期するところはただ生前の成業に止らずして(松本高校——島田三郎)	五七二
(二九九)	人の生を求むるは此の世に價値を認むればなり(松本高校)	五七四
(三〇〇)	蕪村の「椿落ちて昨日の雨をこぼしけり」といふ句は(松山高校)	五七六
(三〇一)	徒然草に法顯三藏の天竺にわたりて(松山高校——藤岡作太郎)	五七八
(三〇二)	椰子の實(山口高校——島崎藤村)	五八〇
(三〇三)	社會集團が複雑多岐に對立してゐるのは(山口高商)	五八二
(三〇四)	我々は我々の現實の状態と(横濱高商)	五八六
(三〇五)	こゝにても雲井の櫻咲きにけりたゞかりそめの宿と思ふに(横濱専門)	五八八
(三〇六)	明治天皇の御製に就きて吾等の最も感激し奉るは(陸士)	五九〇
(三〇七)	道徳を實行するには無限の努力が必要だ(陸士)	五九三
(三〇八)	人生は絶えず流動し(六高)	五九六
(三〇九)	風流の眞義は塵世を忘れることである(六高)	五九八
(三一〇)	神を祭るに敬虔を盡せる儀容は自ら相互の禮節となり(六高)	六〇〇
鑑賞篇		
(三一一)	自分は日比谷公園を歩いてゐた(芥川龍之介)	六〇四
(三一二)	郊原一路満目すべて薄なり(大町桂月)	六〇六
(三一三)	我が庵もまた秋の光景には洩れざりけり(北村透谷)	六〇七
(三一四)	霽れての後こそ雪は目ざましけれ(幸田露伴)	六〇九

(三二五)	翠華搖々として西に向へば(高山樗牛)	六一〇
(三一六)	街道の地面は宛ら霜が降つた如く眞白で(谷崎潤一郎)	六一二
(三一七)	世に住み託ぶる枯禪の人も(綱島梁川)	六一三
(三一八)	晨雞再び鳴いて残月薄く(坪内逍遙)	六一五
(三一九)	小春の日和麗かに晴れて(徳富蘆花)	六一七
(三二〇)	麥や芒の下に居を求める雲雀が(長塚節)	六一八
(三二一)	遠くより音して歩み來るやうなる雨(樋口一葉)	六一九
(三二二)	嬉しきは月の夜のまらうど(樋口一葉)	六二〇
(三二三)	朝月夜のかげ空に残りて(樋口一葉)	六二二
(三二四)	鈴蟲はふり出でて鳴く聲の美しければ(樋口一葉)	六二三
(三二五)	をりふし墓場などへ行つて見ると(吉江孤雁)	六二四
(三二六)	狼の死にならへ(生田春月)	六二六
(三二七)	一日(河合醉茗)	六二八
(三二八)	朝の頌歌(川路柳虹)	六三二
(三二九)	水禽(蒲原有明)	六三四
(三三〇)	雨中小景(北原白秋)	六三七
(三三一)	書物(西條八十)	六四〇
(三三二)	夜の雨(白鳥省吾)	六四三
(三三三)	海のおもひで(薄田泣菫)	六四五
(三三四)	夏の夜(土井晚翠)	六四七
(三三五)	野雀、雀(野口雨情)	六五〇
(三三六)	向日葵(野口米次郎)	六五二
(三三七)	薄暮の旅人(日夏耿之介)	六五四
(三三八)	鴉(堀口大學)	六五九

(三三九)	春の暮れ(三木露風)	六六〇
(三四〇)	水の扉(室生犀星)	六六二
(三四一)	里の夕暮(柳澤健)	六六四
(三四二)	東海の小島の磯(石川啄木)	六六六
(三四三)	秋立つと(伊藤佐千夫)	六六七
(三四四)	花ぐもり(太田水穂)	六六八
(三四五)	一つもて(落合直文)	六七〇
(三四六)	清き水(尾上柴舟)	六七一
(三四七)	沈丁花(金子薫園)	六七二
(三四八)	何事も人間の子の(九條武子)	六七四
(三四九)	我が家をめぐりては降る春雨の(窪田空穂)	六七六
(三五〇)	しづかなるたうげ(齋藤茂吉)	六七七
(三五一)	鳶が舞ふ(佐々木信綱)	六七八
(三五二)	國境とほのぼり來し(島木赤彦)	六七九
(三五三)	向日葵は(前田夕暮)	六八一
(三五四)	山寺の一重の櫻(與謝野晶子)	六八二
(三五五)	伊豆の海(與謝野寛)	六八三
(三五六)	海ちかき噴井の水の(吉井勇)	六八四
(三五七)	幾山河(若山牧水)	六八六
(三五八)	元日や(青木月斗)	六八七
(三五九)	一羽とび(伊藤松宇)	六八八
(三六〇)	わが影に(白田亞浪)	六八九
(三六一)	魚陣うつる(大須賀乙字)	六九〇
(三六二)	沼波しづまり(荻原井泉水)	六九二

(三六三)	松が根の (大谷繞石)	六九三
(三六四)	春風や (大谷句佛)	六九五
(三六五)	島に住めば (河東碧梧桐)	六九六
(三六六)	初雷や (高濱虚子)	六九七
(三六七)	東風そよく (角田竹冷)	六九八
(三六八)	元日や一系の天子 (内藤鳴雪)	七〇〇
(三六九)	瘦馬を (正岡子規)	七〇一
(三七〇)	鬪鶏の (村上鬼城)	七〇二
	作者別索引	七〇五
	入試問題校別索引	七一五
	語句索引	七二三
	『解説／塚本哲三の事績と『現代文解釈法』』 佐藤裕亮	七三一

解説／塚本哲三の事績と『現代文解釈法』

佐藤裕亮

*はじめに

書物は、もつとも身近なものから失われていくものであるらしい。学生時代、日々携え学んだ参考書や単語集、資格取得のために線を引きながら覚えたとの本も、いつの間にか棚から消えて、かわりにその時々の仕事や関心を反映した本が並んでいる。さほど珍しいものでもないし、これから使うこともないだろうから、棄ててしまえと紐をかけ、古紙回収の日に出してしまったという読者も多いのではないだろうか。そして恐らくは、本書『現代文解釈法』もまた、大正から昭和の初めにかけて受験参考書としての役割を全うしたのちに、失われていった書物の一つであった。

学習参考書がその形をととのえたのは、一般に、明治四三（一九一〇）年ごろといわれている⁽¹⁾。中学卒業生数の急増と、上級学校進学への競争激化をうけて、出版界でも、学生のための学習参考書として、あるいは、上級学校受験のための準備書として用いられることを想定した、夥しい数の書物が企画・刊行されていく。入試準備のための実用書であるから、内容の信頼性はもちろん、その時々々の受験制度や出題傾向に適應していくことも強く求められた。大正一〇（一九二一）年ごろより入試に頻出するようになった「現代文」への対応は、その一例として挙げられよう⁽²⁾。

本書の初版は大正一四（一九二五）年一月に有朋堂より刊行され、その後、昭和六（一九三一）年二

月に新訂版が、昭和一三（一九三八）年四月には更訂版が出されている。本書の底本は、更訂版・昭和
一六（一九四二）年三月一日発行の二三六版（本書底本の奥付を参照）であり、各版の刷数はさほど多く
はないとみられるものの³、大正の末から昭和戦前期にかけて、多くの読者に迎え入れられていた様子
がうかがえる。

近代日本における青少年の学習と入試については、すでに多くの研究者によって取り上げられてきた。
比較的手に取りやすい著作として、天野郁夫『試験の社会史』や竹内洋『立志・苦学・出世』などがあ
る。また、やや専門的にはなるが、進学案内書や受験雑誌に注目した菅原亮芳『近代日本における学校
選択情報』も近年の教育史研究の水準を示すものとして興味深い。このほか、「国語」の入試に焦点を
絞って考察したものに、石川巧『「国語」入試の近現代史』や鈴木義里『大学入試の「国語」』などがあ
り、入試制度の変遷については『入学試験制度史研究』に概観されている。⁴

本書『現代文解釈法』の背景となる事象については、これらの書物を手にとっていたたくとして、本
稿では少し視点をかえ、本書の作り手、つまり編著者や出版社の側に注目して、簡単な解説を試みたい
と考えている。

*教育者としての塚本哲三

著者、塚本哲三（一八八一～一九五三）について知られることは、ごく限られている。

明治一四（一八八二）年、哲三は岩沢源六の次男として静岡県に生まれた。のち塚本哲英の養子とな
り塚本姓を名乗る。浜松中学校に学び、中等教員国語漢文科検定試験に合格してのちは、教育者として
の道を歩み、熊谷中学校・岩国中学校・立教中学校教諭・立教大学講師などを歴任している。⁵

塚本が受験参考書を手がけたのは、彼がもともと現役の教師であったことによる。日々中学校の教師として上級学校への進学を希望する学生と接し、入学試験の競争が激化の一途を辿る現実と対峙してきた彼は、学生に有用な受験参考書の必要を認め、その執筆・編纂に着手する。明治四三（一九一〇）年には、明治三五（一九〇二）年から四二（一九〇九）年までの入学試験問題を集成した『諸官立学校入学試験漢文問題積義』と『諸官立学校入学試験国語問題積義』を、大正二（一九一三）年には国語・漢文学習のための参考書として、藤井乙男の校閲のもと『精説国漢文要義』を有朋堂より刊行。このうち二種類の『問題積義』は、以来ながく継統されることになる著述業の記念すべき第一歩となった。

当時、数学教育の世界で顕著な活躍を見せつつあった人物のひとりに藤森良蔵がいる。明治四三（一九一〇）年四月、藤森は『幾何学―考へ方と解き方―』を青野文魁堂より刊行、大正三（一九一四）年には山海堂出版部から『代数学―学び方考へ方と解き方―』を、大正五（一九一六）年には『三角法―学び方考へ方と解き方―』を出版、いずれも好評を博している。こうした出版の成功と受験生からの支持に支えられ、ついに藤森は予備校の先駆ともいべき日土講習会を設立、大正六（一九一七）年には主幹・藤森良蔵、編集主任・塚本哲三の体制で雑誌「考へ方」の創刊に踏み切り、受験雑誌のさきがけとなった。塚本の手がけた参考書の中に、『漢文の学び方―考へ方解き方―』、『国文―学び方考へ方と解き方―』、『作文―学び方考へ方と作り方―』など、考へ方研究社から刊行されているのがみられるのは、藤森良蔵の日土講習会や雑誌「考へ方」との関わりがあるためだ。藤森と塚本との関係については、板倉聖宣の「藤森良蔵と考へ方研究社」に言及されているので、関心のある方はご参照いただきたい。⁽⁶⁾

*有朋堂創業者・三浦理との出会い

中学校の教師であった塚本が、多くの受験参考書を手がけ世に送り出したという事実は、本書『現代文解釈法』をはじめとする刊行物や、先に紹介した事績によって明らかだ。しかし、受験参考書や受験雑誌も、出版社・書店を通じて世に流布した印刷物である以上、その背景には、企画の意義を認め出版に携わった人々との協働があったとみるべきであろう。そのあたりの事情を記した資料もないわけではない。たとえば、永井太三郎・塚本哲三編『三浦理君追想録』に収められた塚本の「太く短かつた君の一生」の中に、有朋堂書店およびその創業者三浦理と塚本哲三との交わりを垣間見ることができ

る。僕が三浦君と知るやうになつたのは、明治四十一年の秋、旧師伊藤太郎先生と勝俣銓吉郎氏とが特殊の英和字典を作られる計画の一部をお手伝した時に始まる。その秋僕は山口県岩国中学を辞して、立教中学の先生になつて上京したのであつた。年は二十八だつたが、其の頃の僕はばかに若く見えたものだ（中略）その翌四十二年には諺語大辞典の索引を引受けさせられた。引受けたのではない、引受けさせられたのである。十二月も大分迫つてからやつと索引が纏つて、三浦君と一緒に京都へ行つた。京大へ赴任されたばかりの藤井博士にお目に懸つて、校屋でその原稿をお目に懸けた。僕は車に乗せられて、京都見物に廻る事になつた。索引に対してひどいお小言でも出ては僕に気の毒だといふ三浦君の心尽しからだつたと思ふ。所が大体に於てその索引は著者藤井博士の心からの喜びを得たらしい。三浦君と僕との間が深く結びつけられたのも、その索引に起因すると信ずる。

車中——行き途か帰り途か覚えませんが、国語と漢文の入試問題解釈を作るといふ約束も成立して、

二書共に四十三年に有朋堂から出して貰ふ事になった。それが僕の貧弱な著作事業の抑もの第一歩である。

三浦理はもと三省堂書店の出身で、明治三四（一九〇一）年に有朋堂を設立、しばらくは三省堂の辞書や教科書の取次販売をしつつ、しだいに出版へと事業を広げていった。当所は、樺正董の『数学綱要』や南日恒太郎『英文解釈法』『和文英訳法』など、学生向けの参考書等を中心に手がけていたらしい。塚本が計画の一部を手伝ったという「特殊の英和字典」が具体的にどの書物を指しているのか、先の文章からは詳らかではないが、おそらく明治四四（一九一一）年に刊行された勝俣銓吉郎編『英和例解要語大辞典』のことだろう。もっとも、塚本が得意としていたのはむしろ国語・漢文の領域であり、のちに藤井乙男編『諺語大辞典』の索引作りを引き受けるとその能力は遺憾なく発揮され、三浦と塚本の間信頼関係が兆していく。先に紹介した二種類の『問題釈義』と藤井乙男による校閲のもと刊行された『精説国漢文要義』はまさに、この縁によって生まれた書物であった。

*有朋堂文庫・漢文叢書の編纂

立教中学の教師となり、活動の場を東京に移した塚本は、教鞭を執るかたわら有朋堂の編纂事業にも深く関わるようになる。有朋堂は、学生向けの参考書や小型の辞典を中心にさまざまな書物を手がけていたが、なかでも上田万年・関根正直・藤井乙男を監修者に迎え、明治四五（一九一二）年より刊行が始められた有朋堂文庫は、日本文学の精粹を網羅した閲覧・携帯に便利な一大叢書として版を重ね、南日恒太郎の英語参考書や辞書類と並んで、有朋堂を代表する出版物の一つとなっていく。

たしか四十二年の冬に熟語大辞典の業を了へた永井君が米国に行かれて、その後を故菅野徳助君が引受けられ、「思想大辞典」と「有朋堂文庫」とを計画された。菅野君が総指揮官で、思想主任が服部嘉香君、僕が文庫主任といふ事になった。その後菅野君が雄図空しく、そしてあの犀利深遠な英文の学識を多く世に発表する暇もなく病魔に犯されるやうになつて、ずる／＼に僕が三浦君の相談相手といふやうな事になつて了つた。

「有朋堂文庫」を中心に、殆ど一切の企画を僕に相談された。殊に三省堂の破綻後、同君の依頼で立教中学の方も辞して専心有朋堂の業に従事する事になつた（中略）実際心から信頼されてゐたと思ふ。万事を任せてくれて、細かい事にかれこれ口を出すやうな事は一度もなかつた。藤森君を助けて雑誌「考へ方」をやり、日土講習会の授業をやるやうになつてからも、苦情がましい一言も言はれなかつた。⁽⁸⁾

有朋堂文庫の第一輯は明治四五（一九二二）年から大正三（一九一四）年一〇月まで続々と刊行され、大正二（一九一三）年から大正四（一九一五）年九月にかけて第二輯も刊行された。その収録範囲は広く、和歌・物語・軍記・随筆・近世小説・浄瑠璃・脚本に及び、現在の新書判に近い判型ながら、必要に応じて簡潔な頭注を付し、漢字にはルビをふるなど、限られた紙面の中で工夫を凝らし、通読のための便宜を図り、多くの読者に受け入れられた。

塚本は初期の段階から有朋堂文庫の企画に参加していたが、大正元（一九一二）年一〇月の三省堂破綻後は、ついに立教中学の職を辞し、途中眼を病みながらもこの編纂事業に心血を注いだ。再版予約の

募集や第二輯の会員募集の際には、自ら夜を徹して新聞広告のための原稿を書くほどであったという。⁽⁹⁾第二輯の編纂が終わって暫くのあいだ、塚本は、藤森良蔵の雑誌「考え方」の編集に携わり、日土講習会の教壇に立つが、有朋堂との関係はなおも続き、大正八（一九一九）年から大正一一（一九二二）年にかけて刊行された漢文叢書の編纂において再び中心的な役割を果たしている。

当時、累積四、五万セットを売り上げたといわれた有朋堂文庫は、一般読者に古典テキストを普及・浸透させる先駆的な試みとして大きな成功を収める。⁽¹⁰⁾のちに、国文学者・歌人として知られるようになる木俣修も、有朋堂文庫の読者の一人であった。雑誌「学校図書館」に掲載されたエッセイ「有朋堂文庫の一冊——すがたい青春のきらめき」には、一二歳の頃、有朋堂文庫の広告を見て「内容見本」を取り寄せて夢を膨らませ、名古屋へ修学旅行に出かけたおりに古本屋で『近松浄瑠璃集』上を購入、他の巻も漸次買い求め、繰り返し読むうちに文学へ強い関心を抱き、これを生涯の道と定めるに至った——というエピソードが紹介されていて興味深い。⁽¹¹⁾

昭和に入り、本文校訂や注釈研究が進むと、有朋堂文庫は研究者からはしだいに顧みられなくなっていくが、他に先駆けて人々の身近に、通読可能なテキストを提供した功績は大きなものがあつた。塚本は、教育者あるいは受験参考書の著者であるとともに、出版史のうえでも有朋堂文庫の名とともに記憶されるべき人物であることを、ここでは強調しておきたい。

*通読―精読のみちをひらく

以上のような編纂事業と前後して、塚本哲三と有朋堂は数々の参考書を手がけている。本書底本の巻末に掲載されている広告には二六種類もの書名が列挙されているが、その代表作として、数次にわたる

り、どのような文章（やその書き手）が試験問題として選択されていたのかを知ることでもできる。

内容はいたってシンプルで、どの問題文においても、まず原文を掲げ、「読方」「通解」「考察」を経て解答へ、というスタイルを基調としている。読者はまずルビのふられた「読方」に導かれながら通読し、得られた自らの理解と「通解」とを比較してみることで、及ばなかった部分を明確にしていく。「考察」では主に、その文章を読む上で必要な語彙を中心に、簡潔な説明が示されており、理解を深めていく上での手がかりをあたえてくれている。もちろん解答のありかたは、摘解・大意・要旨・解説・鑑賞のいずれかによって異なるが、文章に直接し、通読から精読へと進んでいく読者を、その一歩前に立って誘おうとする姿勢はかわらない。

この解説のために『現代文解釈法』を読み直す中でふと思いついたのが、安良岡康作『文芸作品研究法』のことだ。安良岡は同書「読む立場の発展」の中で、作品研究が「作品を読むこと」から開始されることを強調し、「通読——精読——達読」という読みの上昇的、発展的過程と「味読」について述べている。⁽¹²⁾ いかなる程度の高い読みも「通読」により支えられ発展していく、あるいは、自己の反復熟読の経験によつてのみ通読から精読への立場の発展が可能となる——という指摘には、目新しさはないものの、実際の学習・研究においてはしばしば見落とされがちな、色あせない重要な指摘であるように思われる。本文の校訂と注釈を緻密にするだけが研究ではないし、他者の批評をもって自らの読書経験にかえることもできない。

もちろん大正六（一九一七）年生まれの安良岡が、塚本哲三に影響をあたえたなどというつもりはないし、入試問題のために抄出されたごく短い文章を通読することと、文学作品全体を通読することを同列に扱うつもりもないが、塚本の参考書が多くくの学習者に受けいれられ、文章を読み、理解を深め、解

答へと結び付けていくための手引きとして活用されてきたことは、著者の事績とあわせて、積極的に評価していく必要があるように感じている。

＊今、『現代文解釈法』をどう活用するか

『現代文解釈法』はすでに歴史的な書物であって、現在の「現代文」学習に直接資するものではない。本書のいう「現代文」はあくまで明治より大正に至る文章が中心であり、その範囲は、現代日本における科目としての「現代文」とも一部重なり合うが、そこに見られる内容や文体は、現代を生きる我々にとっては、すでに縁遠いものとなりつつある。塚本は本書の総説篇において、現代文≡明治時代から後の文と前置きした上で、それらを、

- ① 漢文の系統を引いている現代文
- ② 和文の系統を引いている現代文
- ③ 欧文の系統を引いている現代文
- ④ それ等の融和した現行の現代文

の四種に分類し、明治中期ごろまでは漢文系と和文系が、第一次世界大戦ごろまでは欧文系が、大戦以降はそれらの融和した文体が中心であったという見通しを示している。続いて彼は、漢文系・和文系・欧文系それぞれの例として藤岡作太郎・樋口一葉・島崎藤村の文章が挙げているのだが、就中、藤岡の「平家の滅亡は重盛の明を待つて知らざる也」をめぐる解釈の誤りに関する例示などからは（本書二頁）、大正～昭和戦前期の若者であっても、漢文訓読体で書かれた文章を正確に読めなくなりつつある状況が垣間見え、興味深い。

漢文訓読体は「漢文における書き下し文」に近く、漢文訓読に関する基本的な知識があれば、なんとなく読むことはできる。しかし、古田島洋介が指摘しているように、漢文訓読体には「わかつたつもりでいながらわかつていないことに気がつきにくい」という落とし穴がある。漢文訓読体とは何か、どのような点に留意して読めばよいのか。そうした疑問については、古田島の『日本近代史を学ぶための文語入門』などを参照していただければ、ある程度までは了解されるだろう。⁽¹³⁾しかしそれよりのちは「読む」経験を重ねていくほかはない。

漢文訓読体はもちろん、近代日本の文章を読むための力をつけるためには、できるだけその時代の文章に近接する必要がある。本書に収録された文章の選択や内容の一部には、編纂された時代に由来する、ある種の偏りが認められるものの、手軽に、さまざまな文章に接することができるという点で、現在でも一定の役割を果たしうるのではないだろうか。

*おわりに

有朋堂から『現代文解釈法』が刊行された大正一四（一九二五）年は、教育史の側では「陸軍現役将校学校配属令」公布の年として言及されることが多い。これにより、男子生徒の教練を担当する将校が官立または公立の師範学校、中学校、実業学校、高等学校、大学予科、専門学校、高等師範学校等に配置され、いわゆる軍事教練が行われることになった。すでに大正デモクラシーは退潮傾向をみせ、関東大震災後の大正一二（一九二三）年には「国民精神作興ニ関スル詔書」が、大正一五（一九二六）年には治安維持法が公布され、昭和恐慌を経て、昭和六（一九三一）年九月には満州事変が勃発、日本は急速に国家主義的・軍国主義的な色彩を強めていく。

そうした時代の傾向は、国語教育のあり方や教科内容、教材にも漸次反映されていった。昭和六(一九三二)年と昭和一二(一九三七)年の「中学校教授要目」改正では、国民精神の涵養を目的とした修正が行われている。『現代文解釈法』も先のような状況の変化にあわせて漸次改訂され、その間の試験問題を加えながら、しだいに厚みを増していく。収録された文章の中に、そうした時代を感じさせる表現がみられるのはそのためだ。¹⁴⁾

これまで、本書をはじめとする塚本の参考書は、教科書ではなく、また学術的著作とも言いがたいことから、教育学や日本文学研究の側からは、主たる分析や考察の対象とされてこなかった。しかし、本書の普及度や時代性を考えれば、大正の末から昭和戦前期にかけての中等教育や、入学試験の実態をうかがうための資料として活用していく途もあるろう。研究の進捗を待ちたい。

(1) 板倉聖宣「受験参考書」(『世界大百科事典』一三、改訂新版、平凡社、二〇〇七年)。

(2) 大正一〇年から昭和一五年ごろまでの入試「現代文」の様子については、石川巧「入試『現代文』のはじまり―旧制高等学校・専門学校を中心に―」(『九大日文』三、二〇〇三年一〇月)、同『国語』入試の近現代史」講談社選書メチエ四〇五(講談社、二〇〇八年)に詳しい。

(3) 当時の出版界の慣例として千部を一版(場合によっては五百部を一版)とする数え方・表示が行われていたことについては、清田昌弘「戦前の受験雑誌にみる出版事情―その広告媒体を利用した鈴木一平の戦略―」(『日本出版史料―制度・実態・人―』二、日本エディタースクール出版部、一九九六年八月)に指摘がみえる。なお同論考では、二〇日、一ヶ月おきに版数が増える事情についても、大修館書店・鈴木一平の例として「まとめて印刷した本文の刷り置きを注文に応じて小口に製本し、検印

は著者に直接奥付に捺してもらって都合上奥付の版数を変えて別丁刷りとし、本文末尾に綴り込んだものだ(後略)」と説明しており、塚本哲三『現代文解釈法』についても清田氏が指摘されているような手続きが行われていた可能性がある。

- (4) 天野郁夫『試験の社会史―近代日本の試験・教育・社会―』(東京大学出版会、一九八三年)、竹内洋『立志・苦学・出世―受験生の社会史―』講談社現代新書一〇三八(講談社、一九九一年)、菅原亮芳『近代日本における学校選択情報―雑誌メディアは何を伝えたいか―』(学文社、二〇一三年)、石川巧『「国語」入試の近現代史』(注2前掲書)、鈴木義里『大学入試の「国語」―あの問題はなんだったのか―』(三元社、二〇一二年)、増田幸一・徳山正人・斎藤寛治郎『入学試験制度史研究』(東洋館出版社、一九六一年)。

- (5) 菅原亮芳『塚本哲三』(『民間学事典』人名編、三省堂、一九九七年)に略歴あり。なお、山口県岩国中学校に勤務していた点については、塚本哲三「太く短かかった君の一生」(永井太三郎・塚本哲三編『三浦理君追想録』私家版、一九二九年)に記載がみえる。

- (6) 藤森良蔵と塚本哲三の関係については、板倉聖宣「藤森良蔵と考え方研究社」(『かわりだねの科学者たち』仮説社、一九八七年)にくわしい。

- (7) 塚本哲三「太く短かかった君の一生」(注5前掲書)三一五―三一六頁。

- (8) 塚本哲三「太く短かかった君の一生」(注5前掲書)三一七―三一八頁。

- (9) 塚本哲三と有朋堂文庫の広告に関するエピソードについては、『三浦理君追想録』(注5前掲書)所収の随筆、今津隆治「懐い出」、外島劉「なつかしい思ひ出」を参照。

- (10) 有朋堂文庫については、大曾根章介「有朋堂文庫」(『国史大辞典』一四、吉川弘文館、一九九三年)に概要と収載書目が掲げられている。また出版人による言及としては、鈴木省三『日本の出版界を築いた人びと』(柏書房、一九八五年)、佐山辰夫「出版の近代化と企画の継承―『新編日本古典文学全集』編集者は見た―」(『文学・語学』二〇五、二〇一三年三月)などがある。
- (11) 木俣修「有朋堂文庫の一冊―すてがたい青春のきらめき―」(『学校図書館』二五五、一九七二年一月)。
- (12) 安良岡康作『文芸作品研究法』笠間叢書七四(笠間書院、一九七七年)第二章「読む立場の発展」。
- (13) 古田島洋介『日本近代史を学ぶための文語文入門―漢文訓読体の地平―』(吉川弘文館、二〇一三年)。
- (14) 戦前における中等教育の教科内容については、財団法人教科書研究センター編『旧制中等学校教科内容の変遷』(ぎょうせい、一九八四年)に詳しく整理されており、参考になる。

昭和十六年三月一日 更訂第二百卅六版發行

<p>發行所</p> <p>東京市神田區錦町一丁目 振替口座東京七一四八番</p> <p>株式會社 有朋堂</p>	<div data-bbox="617 492 817 687" data-label="Image"> </div> <p>著作者 塚本哲三</p> <p>發行者 株式會社 有朋堂 代表者 三浦正</p> <p>印刷者 東京市神田區錦町三丁目廿二番地 佐久間修</p> <p>印刷所 東京市神田區錦町三丁目廿二番地 株式會社 有朋堂</p>	<p>昭和十三年四月 八日更訂版發行</p> <p>昭和十三年四月 八日更訂版發行</p> <p>印刷</p> <p>Ⓣ</p> <p>□更訂現代文解釋法□</p> <p>定價金二圓二十錢</p>
--	---	--

本書の底本の奥付

塚本哲三（つかもと・てつぞう）

1981（明治14）年、岩沢源六の次男として静岡県に生まれる。のち塚本哲英の養子となり塚本姓を名乗る。浜松中学校に学び、中等教員国語漢文科検定試験に合格してのちは、教育者としての道を歩み、熊谷中学校・岩国中学校・立教中学校教諭・立教大学講師などを歴任。1953（昭和28）年、歿。主著に、『現代文解釈法』と合わせて三部作と称される『国文解釈法』と『漢文解釈法』（いずれも論創社復刊）がある。

解説／佐藤裕亮（さとう・ゆうすけ）

1983年東京都練馬区生まれ。大正大学文学部史学科卒業、明治大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程修了、同博士後期課程単位取得退学。著書に『鷗外の漢詩と軍医・横川唐陽』（論創社）、共著に『横川唐陽「唐陽山人詩鈔」本文と解題』（論創社）、『明日へ翔ぶ—人文社会学の新視点2—』（風間書房）がある。

現代文解釈法

2017年11月20日 初版第1刷印刷

2017年11月25日 初版第1刷発行

著者 塚本哲三

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1635-7 printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。